默魯庵漫録

第十

380.4
SH62

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第６７条の規定に基づき、平成１２年５月１５日付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです

380.4
SH62

默魯庵漫録

第十

（默魯庵漫録は個人雑誌です）

内容目次

口繪　ビラ一ツ
お亀ヶ池の傳説……1頁
お産の輕くなる禁厭（まじない）……4
多門町の事ども……6
國芳の挿繪本目録……7
奈良の小歌唄……31

廿五日

奈良撿番

ビラの説明

昭和七年十一月二日記

前頁に貼付せる紙片は藝妓なり雇仲居なりの名ひろめをする紙片で即ち一種の名刺に相當する。是を通常ビラと稱へて居る。藝妓雇仲居が新に出ると此のビラを料理屋・宿屋・湯屋・俥帳場・飲食店・散髪屋等の何軒かへ車夫の若い兄さんと連だって『勝勇さんです、宜敷く賴みまっせッ』と挨拶ひろめに歩く。受け取った方家では或る部屋・店先等に幾枚もく貼付けて置く。こうした事からビラの名が生じたのだろう。ビラと同時に近頃では簡略に日本封筒一ーめ(十枚くり)をおひろめと記した慰斗紙に包み挨拶の印にくばる。是を店出とよんで居る。此の挨拶廻りの日も吉日を選ぶ。奈良には檢番が二ヶ所に在って元林院町のは元林院檢番又は舊檢、南市町のは奈良檢番又は新檢と云って居る。元林院は藝妓のみ、新檢は藝妓と雇仲居の兩者が居る。四五年前には五六人の幇間も居たが僅にして廢した。此處のビラは新檢の物で名の上にゲと書いて有るのが藝妓で、やとしたのは雇仲居で有る。此の外席名だけ墨で添刷した異種物がいくらか有るが、旧檢は一通だけで有る。

お亀ヶ池の傳説

新藤默魯庵

何時頃の事か判らないが大和の國宇陀郡曽爾村の太郎路に別ヶ辻なる所が有って、其處に或る若い男が住んで居た。此の男は山村には稀な美男子で、近郷の娘達の間に非常な評判

なり、人知れず思ひを焦す者も少くはなかった。

或る夜の事に其の若者の住居をコツ〳〵と叩く者が有ったので、不審を抱きながら出て見ると、繊弱い一人の女が遽の病に苦しみ、救ひを求めて居るので有った。何處の者とも定かにわからないが、捨てても置けないので、其夜は家に泊めて充分な介抱をしてやった。處が此の女も亦目醒むるばかりの美しさで、介抱する内に男はつい引きつけられて、其の夜の内に二人は割なき仲となって終った。女の名はお亀と呼び、日々かの〳〵しく立ち働くので男も非常に喜び、夫婦の仲も至って睦しく終には玉の如き一子が生れるに至った。

然し男が女房に就いて絶えずいぶかしく思って居る事が有った。けれども女房の機嫌を損じてはとの心遣ひからして、今迄別段に口にも出さずに過ぎ来った。夫れは毎朝

新藤氏遺族より寄贈本

土間に濡れた草履の置かれて有る事と、女房が時々井戸で水鏡をする事とで有った。男は最早二人の仲に子供も生れた事であり、ためらふ氣持ちも薄らいだので、或る夜の寢物語にさりげなくお亀に其の不審を糺すとお亀は悲しげに、

「妾は愈々貴郎とお別れをせねばならぬ時が參りました。妾は眞実人間では有りません。あの亀山の麓に在る池に年古くから、牡の龍と棲んで居る牝龍の變化なのですが、貴郎の餘りにもお美しい容色に深く迷はされ、此處に假の契を結んだので有りました。夫れにしても永らく色々とお世話に預りまして有難う御座います。此の家の井戸水はあの池から流れ湧いて来るのです。貴郎の御不審もごもっともです。そんな理由で妾が一日でもあの池へ帰へる事を缺かせない事が、今貴郎におわかりになりましたでせう。誠にお名残り惜しい事ですが、お別れ致さねばならなくなりました。」

と涙ながらに長物語をして、いとしい みどり児を後に残して池へ帰って行った。

愛妻する妻に餘儀なく別れ、乳呑児を抱へた男の歎きは一通ではなかった。思ひ切れない別れだけに思ひは募り、慕しさはいや増し、赤児は乳を求めて飢に泣く有様で、今は男も居たたまらず、子供を脊負ひ池の畔に訪れ、「お亀えー、おかめー」と呼び續けた。其の聲が通じてか、お亀は元の美しい妾で現はれ泣く子をあやなし、乳房を含めるので有った。そしてたんまり乳を飲んでは、スヤ〳〵と眠の國に遊ぶ我が子のあどけない顔を見る事を喜んだ。斯うした儚ない逢瀬を互に樂み合ふ日が幾日か續いたが、或る日お亀は、

912
6

「妾も斯うして毎日妾の事なり赤ん坊の身を思って、遠い山坂をもいとはずお出下さる貴郎にお目にかゝるのは眞底から喜しく存じますが、今は夫の龍に感付かれて終ひました。斯うして居る間も本當に氣懸りでなりません。一刻も早く此處をお立ち退き下さい。今後はどんな事が有っても此處へ来る事はキット思ひ止まって下さい。そうでないと貴郎のお命にもかゝわりませうから……」

と告げた。其處で男は詮方もなくも牝龍の言葉に從ひ、遣瀬のない幾日かを辛抱しぬいたが、赤児の乳を求めて泣き叫ぶ聲を聞くに忍びず、牝龍の心盡しの言葉も終に顧みる暇なく、再び池の汀に打ち立った。そして「お亀ー」と一言呼んで見たが、あの美しいお亀の姿が浮び出ないのみか、今の今迄鏡の如く輝いて居た水面に俄然波立ち騒ぎ、鱗を逆立て紅蓮の焔の様な舌を吐き出した牡龍が、猛然と現はれて男を頭から丸呑みにせんと龍衣にかかった。男の驚愕はたとへ様なく無我夢中に逃げのびたが、猶も牡龍は男の背後から迫って来た。其處で息も絶へ〳〵にやっと我が家まで逃れ帰ったが、直に病みつき大熱にうかされ翌日は哀れ儚なく父子諸共に死に果てた。

夫れで牡龍が大口を開いて男に追った辺を大口、咽喉をかわかして水を呑んだ所を水飲、立ち上った所を立堀と今も呼び、お亀の棲んだ池だと云ふので、お亀ヶ池と稱へ池は今は浅くなり草など生い茂り埋れ勝ちながら、亀山の中腹に清く澄んだ水を湛へて居る。夏の眞晝、其處に群れ泳ぐ小魚の靜けさ、池辺にはらばふ蝦を見る時は、樹木の無い草山の中腹で有るが、こうした傳説を思ひ浮べられて、一種の凄味に龍衣はれて来る。

そうして哀れな傳説が、靜寂な山村に何時までも残って行く。（昭和七年二月二十五日）

お産の軽くなる禁厭

繪馬堂迷九里

奈良でお産の軽くなる禁厭（まじない）として一部分に次の様な事が行はれて居る。

夫れは、ほうけ（幕）の神様と云って、こうじんぼうけ（くど用として作られた小形の幕で藁すべなり棕櫚で作って有る。形も色々有るが、カットに示したのは藁すべ製の物で余全長曲の七寸五分、すその開き四寸五分、柄部は長さ三寸、徑一寸、價三錢）の新しい物を一本買ひ求め産婦（さんぷ）して九の月目（つきめ）の九日（ここのか）の日にお祀をするので有る。祀る場所は何處と定った様には聞かなかったが、こうじん幕を用ふるのだから、くどの附近にお祀をするのが適わしい様に考へられる。先づ正面に幕を立てかけ之に燈明を點じ、甘酒を一合お供へして産婦が甘酒をおあげ致しますから突張（つっぱり）けにして下さいと祈願するので有る。そしてお祀を済まして後にお供へをした一合の甘酒は他の者に飲まさないですっきりと産婦が飲みヂ干して終ふ。斯うして祈願成就の後には、お祀をした旨幕は川に流して終ふのである。

此の禁厭をして安産をした人が澤山有ると云ふので、夫から夫れへと廣く傳へられてゆくらしい。

私の附近におたきさんと云ふ今年四十幾歳かの髪結が居て、今は十人の子福者（ふくしゃ）で有るが、初から七人目あたりまでは、お産が非常に長引いて困って居た。ところが此の禁厭を法蓮町（前は佐保村大字法蓮）の或る人から教へられ幕の神様をお祀りしてからは非常に安樂な産が出来ると言って

喜んで居る。何んでも四十四歳で十人目のお産の時にも五六町離れた法蓮町の某家で髪を結んで居る時に、腹が痛みだしたので早速家に帰った方が間もなく安産したとの事で有る。

此の禁厭で何故にこうじん幕を神様扱ひにして用ふるのか、九の月目の九日に何故日を選定したのか、甘酒をどうしてお供へ物にするのか、其の理由を考へたいものだと思ふ。九は陽の數とせられて居る。それで五節句の一なる九月九日を重陽と称して居る。陽は芽出度き意が含まれるから此の九月九日に因んで此の日を選んだのではなかろうか。此の五節句も九月九日にせずとも他のいづれにしても操擇出来るが、臨月は十ケ月目で有る處から、特に此の日を吉日と定めたのではなかろうかと考へられる。甘酒は適當に食すると便通が（是に最も近き）非常に都合より。便秘で困る時は苦い薬や、ロざわりのするぜんざいを飲用するより甘酒をのむに限る。斯うした通じの好い点にかこつけたのではなかろうか。又甘酒は醴酒とも書き、「ひとよざけ」と呼ぶ。一夜の内に出来るから速成的で有る。即ち奈良地方の方言で有るはやまくの酒で有る。此のはやまくに出来る物で有るかゆら、ほうけの神様の供物にするのかも知れない。幕を用ふるのは餘り滑稽に過ぎた考へ方かも知れぬが、掃き出す用具だから吐き出させる即ち産み出すに適わしいとの謎で有るのだろう。（昭和七年一二月二十六日）。

お産の禁厭をよめる愚心作　數奇亭不被止

はき出すに　くくとはやまく　出来るなり（七・三・四よめる）

甘く入れたる　こうぢんなるため

多門甲の事ども

新藤 默魯庵

奈良の多門甲に現住の鏑木武三氏（表具師）は同心の家柄で有る。南都奉行所が所在した當時は多門には與力の屋敷が二軒と其の他は同心の住家のみで有った様との事だが、現在では住宅地域として認められ知識階級者の住む者多く、昔ながらの居住者としては與力の玉井氏と同心では鏑木氏、大井氏等の末裔が残存するに過ぎない。其の鏑木武三氏が祖父より聞き傳へたと言ふ話では、松永彈正久秀の居城たりし多聞城址は南都奉行所所屬の射撃練習場として使用せられて居た。夫れで射撃場に時々奉行が出馬する為に多門の各屋敷は総じて平屋建にて二階建等に作る事を遠慮したとの事で有る。

又多門は元禄前は一体に墓地らしかったので今も地中から相當に古い墓石がよく掘り出され、現在の大井氏居宅（數年前に新築した）地からは六文錢が澤山出たとの事で有る。総じて奈良の寺、所謂墓寺は元禄以後のものゆえで其の當時寺・墓地の大改葬が何等の理由で断行されたのではないかとの事で有る。

（昭和七年一八月十八日稿）。

私は豫てより浮世繪を愛好して居る。其處で當然の結果として浮世繪の研究と云ふ廣大な題目を捕へて着手した事が有つたが、仲々容易の業ではなかつた。それで終に放棄しなければならない事になつた。夫れは機會を捕へてあらゆる浮世繪を見なければならず、研究の便宜上、錦繪、版本等を相當に所有しなければならない。又有力な浮世繪蒐集家を知己に持ち隨時披見する便がほしい。夫等が私の樣な貧弱な者にはどうしても出來難い事で有る。從つて幼稚ながらも研究の歩を運ばせるのに不都合な立場に落ちる憾が有る。

私の蒐集した浮世繪版畫の枚數は現在で二千枚以上に達するとは言へ、英泉・三代豐國・國芳・國周・芳年と云つた、浮世繪界の末期に屬する人の手になる物のみで、然も優秀な版画は至つて乏しい。初期なり中期には作品の繪を通じて私の好む繪師も少くはない。然し夫等の人の傳記だけに就いて研究しようとするさへ、恰も垣根越しに美しく咲ける花を研めようとする樣なもので有る。其處で私は末期の繪師の内から擇び出した方が國芳で有る。國芳の版畫はかなり所持して居るが夫れだと言つて私の所藏品の大半は國芳の版畫で占められて居ると云ふのではない。末期の繪師中でも異彩を放つて居る外に國芳の性格が私を引きつけずには置かない。國芳と對立の立場に有る三代豐國は非常にお大名氣分の濃つた人で有るが、國芳は至つて民衆的な氣分の躍動して居る人で有る。平民藝術を標榜して建つた浮世繪

にはすつて付け左樣な人柄で有るからだ。

私は國芳の研究の手初めに彼の挿繪本目録を作成した。しかも未だ不充分で有る事は免れまい。いづれ機を見て補正しなくてはならない事だろう。此の目録の作成には朝倉無聲(竜三)氏の新修日本小説年表(天正十五年出版)を主として、國書刊行會の新群書類從の第七、書目を參照した。牧録の配列は語音順によらずして出版年の順に從つた。夫れは國芳の所傳を考察するのに便利で有るからだ。末尾には參考として軟派本類の目録を附記する事にしたが、是は出版年を調ぶるに容易でない點からして五十音順に配列した。

新群の略は新群書類從を示し、書名の頭に△印の無き物は再出書なり。

◎文化十二年出版(國芳十九歳の時)

△現金御利生・千社參、　二冊、　振鷺亭作、　滑稽本、

△菖蒲草・撿五月雨、　三冊、　昇亭北岐山作、　讀本、

新群に作者名は文東陳人とあり。

◎文化十三年出版(二十歳の時)

△蝶衝曽我佛、　六冊、　山東京傳作、　国貞・国直も画く、　合巻、

新群に蝶千鳥曽我佛とあり

◎文化十四年出版(廿一歳の時)

△娘歌留嘉留多、　三冊、　橋本德瓶作、　合巻、　河源板、

◎文政十年出版（世一歳の時）　此の間九年間國芳の挿繪本を見ず、

△運者子を松山噺　六冊　國十郎作、　五柳亭徳升代作、合巻、泉市板、

◎文政十一年出版（世二歳の時）

△一休禪師諸国物語、四冊、　五柳亭徳升作、合巻、

△ぬしや誰問白藤、六冊、市川三升作、徳升代作、合巻、佐野屋板、

新群に主或誰問ヒ白藤、國十郎作、代作者詳かならずとなれり、

△宮戸川三社綱舟、六冊、市川三升作、徳升代作、合巻、山口屋板、

新群に國十郎作、代作者不詳、文政四年板曲亭馬琴作に同外題の著あり、

◎文政十二年出板（世三歳の時）

△於竹大日如来・稚繪解、三冊、十返舎一九作、合巻、

△西国奇談・月夜神樂、初編、六冊、五柳亭徳升作、合巻、佐野屋板、

二編は天保二年に出版され溪齋英泉画く、

△串戲（じゃうだん）一つこなし、六冊、十返舎一九作、國丸も画く、合巻、

文化二年及び三年版「滑稽しつこなし」前後編の改題再版、

△稗（はい）史水滸傳、初一六編、廿四冊、山東京山譯、合巻

初編より廿編（安政四年出版）まで續く、但し七編より以下は國字（かながき）水滸傳と改題して九編までは柳亭種彦が譯し、以下十八、十九の両編を松亭金水が譯せる以外は笠亭仙果の譯になり画は十九編（嘉永元年出版）だけ、どうした事か二世豊国が画いて居る。

◎天保元年出版（國芳廿四歳の時）

△怪談・波良づゝみ、六冊、五柳亭徳升作、合巻、山口屋板、

新群には怪談波間維津々美となれり、

△大内興隆・十杉傳、廿五冊、爲永春水作、国安と画けり、讀本、

△滑稽三寶荒神、三冊、登鯉作、滑稽本、

・国字（かながき）水滸傳、七・八編、八冊、柳亭種彦譯、合巻、

△昔語土手編笠、三冊、河竹世山人作、人情本、

◎天保二年出版（世五歳の時）

・國字水滸傳、九編　四冊、柳亭種彦譯、合巻、

△滑稽笑話・貧屋雜談、三冊、瀧亭鯉丈作、滑稽本、

△武者修行話・矢猛心兵衛、十冊、五柳亭徳升作、

本年出版の武勇水陸傳、安秀画の續編なり、

△椀久松山・柳巷説話、五冊、曲亭馬琴作、讀本、

文化四年版を再版せり、

◎天保三年出版（世六歳の時）

△近江国源五郎鮒、一冊、五柳亭徳升作、小合巻、

△怪談・徒然噺、一冊、五柳亭徳升作、小合巻、

△奇談・和可紫、初編、三冊、喜久平山人作、人情本、

・奇談・和可紫、二―四編、九冊、爲永春水補、人情本、

△熊谷武功軍扇、六冊、烏有散人作、合巻、
　烏有散人作の書は国芳のみ画ける点よりして或は国芳の匿名なりんか、
△閨怨・須磨の月、三冊、風亭馬流作、人情本、
・国字水滸傳、十編、四冊、笠亭仙果作、合巻、
△五節句供稚童講釋、八冊、山東京山作、国安も画けり、合巻、
　二編は翌四年に出版せり、国安のみ画けり、
△滑稽・枯木の花、一冊、三笑亭可楽作、滑稽本、
△十二趣向・當の似寄話繪、一冊、磯間臭路作、噺本、
△関東白狸傳、一冊、五柳亭徳升作、小合巻、
△つれづれ草・玉の盃、初編、六冊、山東京山作、合巻、
　角書に兼好傳奇とあり、三編に至る天保九年出版で完結、
△花吹雪縁柵、六冊、相州磯部作、合巻、
　繪表紙は前北斎爲一の画く所なり、新群には柏琳作柳亭種彦校とあり、
　柏琳は仙客亭と号し荒井氏通称金次郎、相州大磯に住す、種彦の門人なり、
△春雨殷ゆるしの鄭、六冊、五柳亭徳升作、合巻、山本板、
△風月花情・沉魚傳、九冊、松亭金水作、人情本、
　二編は新錦魚傳と改題、貞童画、三編より錦の魚と改題、天保十二年完結、
△義仲朝日鎧、五冊、烏有散人作、合巻、
◎天保四年出版（世七歳の時）

・國字水滸傳、十（十二編、八冊、笠亭仙果譯、合巻、
△夏祭鱗案・改色團七島、六冊、吉見種繁作、合巻、西村板、
　新群には色上げとあり、笠亭仙果の序文あり、
△化史太鼓傳、六冊、十返舍一九作、合巻、
　文化元年版化物太平記の改題再版、旧版は一九の自画作で出版後間もなく絶判を命ぜられ作者は手鎖版元は過料に處せらる、
△両頬忍夜櫻、初・二編、八冊、二世立川焉馬作、國安と画く、合巻、
△本朝武王軍談、六冊、二世（糸井一九作、合巻、森治板、
◎天保五年出版（世八歳の時）
△石橋山義兵白旗、五冊、烏有散人作、合巻、
△狂歌覺玉集、一冊、聽風軒選、狂歌本、出版元不明、
△小いな半兵衛・大和染對振袖、八冊、二世立川焉馬作、合巻、森治板、
◎天保六年出版（世九歳の時）
・國字水滸傳、十三編、四冊、笠亭仙果譯、合巻、
△自問自答戯言句合、二冊、柳亭種彦作、合巻、鶴喜板、
△菅原傳授手習鑑、六冊、墨川亭雪麿作、合巻、
△つれづれ草・玉の盃、二編日暮硯、六冊、山東京山作、合巻、
　新群には天保四年刊とあり、
△天竺徳兵衛異國話、四冊、夷福亭宮守作、合巻、丸甚板、

新群には西馬作とあり、
△當麻八幡祭、四冊、鶴屋南北作、合巻、
△復雛言曲輪達引、六冊、山東京山作、合巻、
△三国太郎再来傳、六冊、二世一九作、国直と画く、合巻、竹内板、

◎天保七年出版（四十歳の時）

△稲葉山操松枝、四冊、寶田千町作、合巻、
△復雛言梅の接、四冊、寶田千町作、合巻、川口正藏板、
新群には敵討梅継穂とあり、
△復雛言千穀取、四冊、藤壽亭松竹作、合巻、山口屋板、
文化七年版の千穀通稚智恵鏡の改題再版、當本は千歳亭松武作、喜多川月麿画、新群には一名復雛言寶の市とあり疑はし、
△復雛言寶市、四冊、藤壽亭松竹作、合巻、
・国字水滸傳、十四編、四冊、笠亭仙果訳、合巻、
△東海道五十三驛、初編、四冊、鶴屋南北作、合巻、山本板、
△東国奇談月夜櫻、六冊、五柳亭徳升作、合巻、佐野屋板、

◎天保八年出版（四十一歳の時）

△宇加禮奇人傳、三冊、青林堂錦八編、嘶本、
當時有名なる幇間作小咄を集めたるものなり、
△森羅萬象心意氣、四冊、五柳亭徳升作、鶴屋板、

朝倉本には文政十年出版北尾美丸画となれり、
・東海道五十三駅、三編、四冊、鶴屋南北作、合巻、山本板、
新群には五世南北とあり、
△一筋道雪晒望、四冊、笠亭仙果作、合巻、鶴喜板、
新群には一筋道雪迺晒望とあり、仙果此作より師翁柳亭種彦より独立の著作を許され校閲の署名を免ぜられたり、
△視藥霞報條、三冊、曲亭馬琴作、合巻、鶴喜板、
寛政十二年版本の再版、北尾重政画く、

◎天保九年出版（国芳四十二歳の時）、

・国字水滸傳、十五編、四冊、笠亭仙果作、合巻、
・つれづれ草玉の盃、三編不見世の友、六冊 山東京山作、合巻、
新群には見ぬ世の友とあり、
△昔昔旧在多土佐、四冊、宝田千町作、合巻、
新群には昔古在多土佐となれり、

◎天保十年出版（四十三歳の時）、

・国字水滸傳、十六編、四冊、笠亭仙果作、合巻、
△清正一代記、五冊、烏有散人作、合巻、
△清盛一代記、五冊、烏有散人作、合巻、
△百面相、四冊、花笠文京作、合巻、

△无筆節用似字盡、三册、曲亭馬琴作、合巻、

寛政九年版の黄表紙の再版、

◎天保十一年出版(四十四歳の時)

△花檜詠義經、五册、美圖垣笑顔作、合巻、

△名所競睦珠歌話、四册、美圖垣笑顔作、合巻、

◎天保十二年出版(四十五歳の時)、

△繪本・柳一代記、五册、鳥有必散人作、合巻、

・国字水滸傳、十七編、四册、笠亭仙果作、合巻、

△金纏(きんぱく)題名將手鑑、四册、美圖垣笑顔作、合巻、

△小女郎蜘蛛怨苧環、六册、曲亭馬琴作、合巻、

文化六年版の再版にして本年は上編四册中編二册を翌十三年には中編三册下編四册を梓行す是等は勝川春亭画く、

・東海道五十三駅、三編、四册、鶴屋南北作、合巻、山本板、

△浪華鴻美梓差櫛、四册、笑顔亭、宝亭文雪作、合巻、

△鳩八幡霞陳幕、六册、美圖垣笑顔作、合巻、

新群には陣幕となれり或は然らん、

△和田酒宴智勇兼備志、六册、美圖垣笑顔作、合巻、

◎天保十三年出版(四十六歳の時)

△朧月猫草紙、初編、八册、山東京山作、合巻、山本板、

嘉永二年七編にて完結、

・小女郎蜘蛛怨苧環、六册、曲亭馬琴作、合巻、

△和漢一雙又張交屏風、四册、美圖垣笑顔作、合巻、

◎天保十四年出版(國芳四十七歳の時)、

△舞扇出世景清、四册、美圖垣笑顔作、合巻、

◎弘化元年出版(四十八歳の時)

△勸善懲悪乗合話、初編、六册、柳下亭種員作、合巻、

嘉永四年出版の八編にて完結、

△教訓乳母草紙、初編、四册、山東京山作、合巻、

嘉永六年の十編にて完結、三編より八編までは三世豊国、九編は国政改国貞、十編は二世国貞画く、

△愚心智太郎懲悪傳、六册、二世楚満人作、合巻、

文政十三年版の再版、巻末に春齋英笑画とあり、

△孝悪両面鏡、四册、萬亭應賀作、合巻、

△滑稽繪姿合、一册、柳下亭種員作、中本、

△善悪早染草、初編、四册、山東京山作、合巻、

繪表紙は国貞改豊国筆になれり、

△前太平記初編・遠雷殷平安城、四册、夷福庵樂亭主人譯、合巻、

巻末に原版燒失中絶増補再刻、天保十五甲辰年孟春発兌とあれど原版本

未見、自初編至四編（嘉永四年出版）又續編は安政三年出版、

△忠臣・国性爺將棊合戦、四冊、萬亭應賀作、合巻、

△當時流行・名響書譽曲獨樂、三冊、柳下亭種員作、合巻、

△はなし大全、一冊、柳下亭種員作、噺本、

◎弘化二年出版（四十九歳の時）

△稲葉山敷ヶ瀧、四冊、宝田千町作、合巻、

△繪本・篠塚一代記、初編、四冊、三世楚満人作、合巻、

・朧月猫草紙、三編、四冊、山東京山作、合巻、

・勧善懲悪乗合船、三編、四冊、柳下亭種員作、合巻、

・教訓乳母草紙、二編、四冊、山東京山作、合巻、

△磯石山浮世精霊（つみのつま）、四冊、萬亭應賀作、合巻、

△猫児牝（つれづま）忠義合奏、四冊、曲亭馬琴作、合巻、

文化三年版の再版、原本には豊国画、

◎弘化三年出版（五十歳の時）、

・繪本・篠塚一代記、三編、四冊、萬亭應賀作、合巻、

・朧月猫草紙、四編、四冊、山東京山作、合巻、

・勧善懲悪・乗合話、三編、四冊、柳下亭種員作、合巻、

八編は嘉永四年出版、四―六編は二世豊国画、七・八編は国政画、

◎弘化四年出版（五十一歳の時）

・朧月猫草紙、五編、四冊、山東京山作、合巻、

・国字水滸傳（がかき）、十八編、四冊、松亭金水譯、合巻、

△現世扶桑太郎（げんせいふそうたろう）、六冊、櫻花山人作、国芳門人等画、合巻、

◎嘉永元年出版（国芳五十二歳の時）

・朧月猫草紙、六編、四冊、山東京山作、合巻、

△奥羽一覽・道中膝栗毛、初―三編、六冊、二世一九作、滑稽本、

自初編至五編全部十五冊、嘉永三年に完結、三編以下は奥羽膝栗毛と改題、いづれも逸見一信画く、

△假名讀八犬傳、初―三編、十二冊、二世爲永春水作、合巻、

十六編まで春水作、廿七編まで琴亭童作、廿一編（明治元年版）まで魯文作、廿八編以下は国芳門人芳幾画く、

△黄菊花都路、初―三編、八冊、二世一九作、合巻、

△善惡迷所一覽、一冊、一筆庵主人作、中本、滑稽本、

善惡道中記の第三編なり、

△両筋戀山道、四冊、萬亭應賀作、合巻、

△紫菜浅草土産、四編、四冊、二世一九作、合巻、

弘化二年に初編、嘉永三年に五編、他はいづれも二世豊国画く、

◎嘉永二年出版（五十三歳の時）

△憲現お竹物語、一冊、緑亭川柳作、合巻、

・朧月猫草紙、七編、四冊、山東京山作、合巻、
△譚柄瑠璃茸、初編、四冊、西澤一鳳作、合巻、
一名朝顔草紙と云ふ、同年出版の三編は二世豊国画けり、
・假名讀八犬傳、四―七編、十六冊、二世春水作、合巻、
△神編藻塩草、初編、四冊、萬亭應賀作、合巻、
嘉永六年版の四編にて完結、二―四編は国麿画く、
△花暦八宝人、五編、三冊、一筆庵・與風亭作、芳綱も画く、滑稽本、
上巻は一筆庵主人作國芳画、中下巻は與風亭枝成作芳綱画、
初―四編、三編追加各二冊は瀧亭鯉丈作英泉(一筆庵主人)画く、
△本朝金剛傳、初編、四冊、萬亭應賀作、合巻、
◎嘉永三年出版(五十四歳の時)
△浮世丹全傳、初・二編、八冊、柳下亭種員作、合巻、
・譚柄瑠璃牽牛花、二編、四冊、西澤一鳳作、合巻、
・假名讀八犬傳、八―十編、十二冊、二世春水作、合巻、
△七組入子枕、初・三編、八冊、笠亭仙果作、合巻、
妹脊築山の頭書あり、
△堀川唄眞実錄、初編、四冊、笠亭仙果作、合巻、
・本朝金剛傳、三編、四冊、萬亭應賀作、合巻、
◎嘉永四年出版(五十五歳の時)

△嵐山花復讐、六冊、柳下亭種員作、合巻、
・假名讀八犬傳、十一―十四編、十六冊、二世春水作、合巻、
△釜ヶ淵水増石川、初・二編、八冊、花笠文京作、合巻、
△源氏雲弦月、初編、四冊、柳下亭種員作、合巻、
六編にて完結、三―六編は嘉永六年出版で廣重画けり、
新群には嘉永三年出版となり、妻は白縫、夫は鬱江との頭書あり、
・七組入子枕、三・四編、八冊、笠亭仙果作、合巻、
・堀川唄眞実錄、二編、四冊、笠亭仙果作、合巻、
◎嘉永五年出版(五十六歳の時)
△稲妻形怪鼠標子、初・二編、八冊、樂亭西馬作、合巻、
・譚柄瑠璃牽牛花、三編、四冊、西澤一鳳作、合巻、
・假名讀八犬傳、十五・十六編、八冊、二世春水作、合巻、
・源氏雲弦月、二編、四冊、柳下亭種員作、合巻、
・七組入子枕、五・六編、八冊、笠亭仙果作、合巻、
△初若菜雪曙、初・二編、八冊、立齋光彦作、合巻、
△東山樓冊子、四冊、石川一口作、合巻、
表紙には鶴屋南北作とあり、新群には鶴屋南北作東山樓莊子、五冊、
・堀川唄眞実錄、三編、四冊、笠亭仙果作、合巻、
◎嘉永六年出版(五十七歳の時)

・稲妻形怪鼠標子、三・四編、八冊、樂亭西馬作、合巻、
△御伽譚博多新織、初―三編、十三冊、楳田舎好文作、合巻、
・譚柄瑠璃牽牛花、四編、四冊、西澤一鳳作、合巻、
・假名讀八犬傳、十七・十八編、八冊、鳳籟庵琴童作、合巻、
春水作の續で廿七編まで琴童作、廿八編以下は魯文作となれり、
△追局・八犬傳後日譚、初―三編、十二冊、二世春水作、合巻、
△日蓮記旭衣、三編、四冊、萬亭應賀作、合巻、
初編(嘉永三年)二編(嘉永三年)、画は両編ともに二世豊国なり、
・堀川唄眞実録、四編、四冊、笠亭仙果作、合巻、
△松浦船水棹婦言、初二編、八冊、笠亭仙果作、合巻、
五編は安政三年版で画は国久、
△與話情浮名横櫛、初・二編、八冊、瀬川如皐原作、楳田舎好文編、合巻、
◎安政元年出版(五十八歳の時)
△適女廻鏡山、初・二編、八冊、一筆菴英壽作、合巻、
・御伽譚博多新織、四編、四冊、楳田舎好文作、合巻、
・假名讀八犬傳、十九・廿編、八冊、曲亭琴童作、合巻、
・八犬傳後日譚、四編、四冊、二世春水作、合巻、
△花紅葉解説絹川、三冊、楳田舎好文作、合巻、
・堀川唄眞実録、五編、四冊、笠亭仙果作、合巻、

・松浦船水棹婦言、三編、四冊、笠亭仙果作、合巻、
・與話情浮名横櫛、三・四編、八冊、瀬川如皐原作、楳田舎好文編、合巻、
◎安政二年出版(五十九歳の時)
・稲妻形怪鼠標子、五編、四冊、樂亭西馬作、合巻、
・御伽譚博多新織、五・六編、八冊、楳田舎好文作、合巻、
・譚柄瑠璃牽牛花、五編、四冊、西澤一鳳作、合巻、
・假名讀八犬傳、廿一・廿二編、八冊、曲亭琴童作、合巻、
△狂歌茶器財集、一冊、安満の門、廣重と画く、狂歌本、江戸清流亭藏版、
△新編金雞談、四冊、二世春水作、合巻、
△天地人脚色正本、初・二編、八冊、河竹新七作、合巻、
△南柯夢女舞衣、初・二編、八冊、樂亭西馬作、合巻、
・八犬傳後日譚、五編、四冊、二世春水作、合巻、
・堀川唄眞実録、六編、四冊、笠亭仙果作、合巻、
・松浦船水棹婦言、四編、四冊、笠亭仙果作、合巻、
・與話情浮名横櫛、五―七編、十二冊、瀬川如皐原作、楳田舎好文編、合巻、
◎安政三年出版(六十歳の時)
・假名讀八犬傳、廿三・廿四編、八冊、曲亭琴童作、合巻、
△新撰笠松鬼神傳、十冊、松風亭琴調作、讀本、
・八犬傳後日譚、六編、四冊、二世春水作、合巻、

△夢想兵衛勘略記、初ー三編、十二冊、笠亭仙果抄録、合巻、
◎安政四年出版（六十一歳の時）
△繪本・豊臣勲功記、九〇冊、八功舎徳水作、讀本、
明治十七年に至り完結せり、
・國安水滸傳、廿編、四冊、笠亭仙果譯、合巻、
嘉永四年にも國安水滸傳廿編、四冊、ありて茲では二世豊国画くとあり、
・假名讀八犬傳、廿五・廿六編、八冊、曲亭琴童作、合巻、
△月宴更科譚、初・二編、八冊、柘園梅彦作、合巻、
・八犬傳後日譚、七編、四冊、二世春水作、合巻、
・八犬傳後日譚、初ー六編、廿四冊、二世春水作、合巻、再版、
・夢想兵衛勘略記、四・五編、八冊、笠亭仙果作、合巻、
◎安政五年出版（六十二歳の時）
・假名讀八犬傳、廿七編、四冊、曲亭琴童作、合巻、
廿八編以下は魯文作にて廿一編（明治元年）に至る、
◎安政六年出版（六十三歳の時）
△假名手本忠臣蔵、初・二編、八冊、柳水亭種清作、芳房も画く、合巻、
△児雷也豪傑譚、廿四・廿五編、八冊、柳下亭種員作、二世国貞と画く、合巻、
天保十年に初編出で慶應二年四十四編にて終る、初編より八編までは美園垣笑顔作、九編より十編は一筆庵可候作、十二ー廿五編は種員作、廿七ー廿九編

は種員豊廣稿種清補作、四〇ー四四編は種清作、挿繪は一ー四編は国貞
五ー十四編は二世豊国、十五ー廿三編は二世豊国と国輝、廿四・廿五編は国輝、廿六
廿八編は国輝改国光、廿九ー卅一編は国盛、卅二・卅三・四十三・四十四編は二世国貞
三十九・四十編は芳幾、四十一・四十二編も芳幾、と二世国貞の画くところなり、
△鄙都（ふるのみやこ）大内物語、初編、四冊、仙果改二世種彦作、合巻、
慶應三年版九編まで、
◎安政年間出版
△狂歌一代男、一冊、梅曲農屋、狂歌本、江戸本町側藏版、
◎萬延元年出版（六十四歳の時）
△伊呂波文庫、三・四編、八冊、柳烟亭種久作、合巻、
初編二編は安政六年版国盛画、文久二年七編にて完結、芳幾画、
△假名反古・一休草紙、十二編、四冊、柳烟亭種久作、合巻、
初編は嘉永五年十一編は安政六年にて種員作、初ー六編は国輝画七編
は国輝改国光画、九ー十一編は二世国貞画、
△金瓶梅曽我賜宝、初ー四編、十六冊、柳水亭種清作、合巻、
△大日本開闢由来記、四冊、一夢道人作、讀本、
△不思議塚小説桜、初編、四冊、柳水亭種清作、合巻、
四ー六編の繪は芳幾、七・八編（慶應三年）は二世国貞画く、
◎文久元年出版（六十五歳の時）

・伊呂波文庫、五・六編、八冊、柳烟亭種久作、合巻、
・假名反古・一休草紙、十三編、四冊、柳烟亭種久作、合巻、
△御所梅樹梅松録、初―三編、十二冊、鶴亭秀賀作、合巻、
十五編にて完結、明治年代、
・児雷也豪傑譚、世七・世八編、八冊、柳下亭種員遺稿、種清補綴、芳虎画、
・鄙都大内物語、二編、四冊、二世種彦作、合巻、
文久二年より慶應三年までに三―九編出で作者は二世種彦でいづれも芳虎画けり
四編後は鄙都大内譚となれり、
△風俗浄閑嶽、十編、四冊、柳水亭種清作、合巻、
安政元年に初編出で慶應二年十四編で終る、初―三編は種久作以下は種清
作、繪は初―九編まで二世国貞、十―十三編は芳幾、十三・十四編は二世国貞なり、
・不思議塚小説樹、二・三編、八冊、柳水亭種清作、合巻、
四編は芳幾の画くところ出版年不詳、
◎文久二年出版(死歿一年)
・御所樹梅松録、四・五編、八冊、鶴亭秀賀作、合巻、
◎文久三年出版(歿後二年)
△繪姉妹娘見草紙、初編、四冊、假名垣魯文作、合巻、
・御所樹梅松録、六・七編、八冊、鶴亭秀賀作、合巻、
八―十一編は門人の芳虎画けり、

◎元治元年出版(歿後三年)
△雲龍九郎偸盗傳、六冊、三馬遺稿、西馬増補、合巻、
△水魚連狂歌双六、中一冊、鶴廬序、柴田是眞と画く、狂歌本、水魚連藏版、
◎慶應元年(歿後四年)
出版書を見ず、
◎慶應二年(歿後五年)
・小女郎蜘蛛怨苧環、全部、曲亭馬琴作、合巻、
初編は未文化六年に出る、勝川春亭画、當年のは三版もの、
◎出版年代未詳のもの、
△十二月稚遊、二冊、
△十二趣向・茶番噺、一冊、磯間眞路作、彩滑稽本、
△花咲爺譽魁、一冊、合巻、
△萬福長者宝藏入、二冊、合巻、

軟派本目録

△秋の七草、
△淫篇深閨梅、
△繪本逢繪山、半紙本、三冊、
△開談百鬼夜行、春畫化物、十二枚、俗に四ツといふ、

△閨中大　　吾妻男作、　三冊、
△五十三次戀の初旅、中本、一冊、
△小紋帳、　三冊、
△佐世川新工夫、艶本十一段返一、半紙本、三冊、
△宝船比知婦工人、明珍房作、半紙本、三冊、
△旅枕五十三次、水澤山人玉の門主人作、三冊、
△筑紫松藤柵、三冊(上・中・下)、猿猴坊月成作、四季のながめの後篇)、
△葉奈伊賀嘉多、半紙巻本、三冊(上・中・下)　好色外史・仇埜山人合作、
　内部の見出には玉液池詰花筏とあれり、序は好色外史で末尾に何色やすらかになくつといふと一の花見月とあり、
　下巻の末尾に仇埜山人ふたゝびいふ池次郎色道の修行のはなしは事ながければ艶談奇聞と外題して讀枕とす他日発板を待給へとあり、又池次郎お玉になれそめてより妾宅に通ひて始終は本宅へ呼迎へて後母親の茶飲友達再縁のはなし女同志の色事閨中の事ども花筏の後編花乙保　三冊　近刻とあり、
　此花乙保の挿繪等は多分国芳ならんかと想定される、
△花結色陰吉、半紙本、三冊(上・中・下)　女好庵の序及び作、
△葉名茂見志、半紙本、三冊、
△春情花の縁、三冊、戀痴庵主人作、
△百聞我話、裝入春画、十二枚、俗に四ッと称するもの、

△風俗粋妓傳後篇、三冊、大珍堂鷹狩作、
　前篇は三冊、落書庵景年作で三代豊国の画なり、
△風流通妓傳、中本、三冊、
△胄のまぼろし、彩色摺小本、
△よゝこの節、一冊、

此の挿繪本類目録を基本として國芳の所傳を究むれば得るところは決して少くは有るまい。然るにこうした目録により彼の所傳を正しく補綴する爲めには、なほ他の繪師なり作者の目録を作成して參照し、比較しなければ完全とは言へない。是に仍て国芳が挿繪師として活動し初めた年令、国芳の身上の変化、作者との交友関係等を究明するに難くない。言ふまでもく作畫年と出版年とは一致するものでない事は注意せねばならぬ。夫れば目録の終を見れば判る様に国芳の死歿した文久元年後(元年を含めず)毎口三十一冊出版されて居ることに見ても明かで有る。慶應元年出版は重版だからこゝには計算しなかった。国芳の一生に於ける挿繪活動としては約二百口、部数百四十、冊数千以上と言ふすばらしい数にのぼる。国芳が最大に活躍した繪師とは言はないが有数の繪師で有る事が知れる。其の外肉筆に、一枚摺は夥しい數にのぼる。
　次に目録を簡單な表にして一覽の便に資したい。

(昭和七年八月七日)

年代	口數	册數	不明册
文化十二	二	九	○
〃十三	一	六	○
〃十四	一	三	○
計	四	一四	○
文政十	一	六	○
〃十一	三	十六	○
〃十二	四	三十三	六
計	八	九五	六
天保一	九	二十	二五
〃二	四	二十二	○
〃三	十六	六十二	八
〃四	五	三十四	○
〃五	三	十四	○
〃六	八	三十二	六
〃七	七	三十	○
〃八	三	十七	○
〃九	五	十四	○
〃十	九	三十一	○

年代	口數	册數	不明册
天保十一	二	○	九
〃十二	八	○	三十九
〃十三	三	○	十八
〃十四	一	○	四
計	七五	三九	三三六
弘化元	十	○	三十六
〃二	七	○	二十八
〃三	三	○	十二
〃四	三	○	十四
計	二三	○	九〇
嘉永元	七	○	三十九
〃二	七	○	三十六
〃三	六	○	四十
〃四	六	○	四十六
〃五	八	○	四十八
〃六	九	○	六十八
計	四三	○	二七七
安政元	八	○	四十三

此段の數全部上下入れかへ

年代	口數	册數	不明册
安政二	十二	○	六十九
〃三	四	○	三十四
〃四	七	○	三十二
〃五	一	○	四
〃六	三	○	二十
〃年間	一	○	一
計	三六	九○	二〇三
萬延元	五	○	三十六
文久元	七	○	四十八
〃二	一	○	二
〃三	二	○	十二
計	十	○	六二
元治元	一	○	七
慶応二	二	○	両板
不明	四	○	六
總計	二一一	一三九一	〇八六

此段の數全部入れかへ

奈良の小唄

默魯庵つくる

◎青丹よし　奈良のみやこの　面影は
いつに變らず　諸人の
こころを洗ふ　すがたなれ

◎なごやかさ　若草はゆる　山の面
かすみに浮ぶ　五重の塔
繪筆に染めて　ながめすやう

◎なぎの森　ゆかり久しき　藤の花
朱の宮居の　神さびて
みどりに映ゆる　尊嚴さよ

◎馬酔木咲く　杜をぬぐらの　群鹿が

人になれ寄る　風情こそ
ゆかしき奈良の　去るなれ

◎梵鐘の　郷音に暮れる　奈良の里
やすき思ひも　千歳より
今にかはらぬ　うれしさよ

◎月の澄む　池のほとりに　たづめば
水にうつろふ　貴人の
平城のむかしを　偲ばする

◎御佛や　古きほこりの　堂塔も
左ぐひまれなる　そのたくみ
菊のかほりに　さも似たり

◎九重に　旬おくりし　八重桜
今は日の本　かほりみち
萬の國の　果までも

（昭和七年十月六日作）

默魯庵漫録の内容。

第一。一、水谷神社と陰陽石、
二、若草山山麓の陰陽石、
第二。三、觀阿道人と其の墓石、
四、水谷騒動記、
第三。五、興福寺の繪馬目録、
第四。六、奈良木辻遊廓の文献、
第五。七、奈良奉行所同心召出覺書、
八、津のつく地名調、
第六。九、八拾五歳の姙娠、
第七。十、奈良の方言、
十一、吉野山地を語る、
十二、大和の山嶽一覽表、
十三、荒神嶽のお辰墓の傳説、
十四、登山隨想、
第八。十五、新藥師寺の印と福岡隆聖師、
十六、壹錢九厘屋のこと、
十七、だくりひとつ、
第八。十八、浮世繪に就いて、
十九、看板文字の事、
二〇、草津と木津、
廿一、アイヌ語彙に就いて、
第九。廿二、奈良木辻遊廓藝娼妓靈名記、
其の外未詳、
第十。廿三、お亀ヶ池の傳説、
廿四、お産の輕くなる禁厭、
廿五、奈良市多門町の事ども、
廿六、歌川国芳の挿繪本目録、
廿七、奈良の小唄、

口繪類。

興福寺の繪馬に畫ける唐獅子……三。
フレデリック・スタール博士の手蹟……三。
奈良木辻遊廓の古圖……四。
東大寺塔頭眞言院の朱印影……五。
奈良元林院檢番の藝妓の傳票……六。
ハンシ山より眺めたる高見山……七。

912
6

製本控　　伺書號

912 函　6 號　年　月　日

書名　默漫庵漫錄（　ヲ10　）

著者　折口正雄編

受入　年　月　日　／冊

備考

東大寺法華堂執金剛神拜觀券……八。
奈良新藥師寺の印影……八。
奈良檢番の雇仲居の傳票……九。

樂苦我記

▨樂は苦のたね、苦は樂のたね、と云ふことが有る。樂と苦とはいつももんぢりかった樣にもつれ合って居やがる。漫錄を作り上げるのにも愉快な氣持で進む事もあるが嫌いやでたまらなくなる事もある。樂々とはかどる事が有るかはりに、四苦八苦しなくてはならぬ事も有る。此のいやな氣持、苦しい思ひでよく漫錄のことは氣にもかけぬ事が有る。其處が漫錄の漫錄たるゆえんかも知れない。

▨個人雜誌を繼續して行く事は仲々容易でない事丈を自分でやって見てわかって来た。其の理由は色々有るに違ひない。一ツ最初の氣乘りが薄いで来る事。

一ツ、材料に缺乏を来たす事。
一ツ、仕事がつまらなく考へる事。
一ツ、勞作が煩雜な事。
一ツ、經費が續かなくなる事。
一ツ、後援者の無い事又減る事。

▨此の冊子は實費として三拾錢戴きたい。此の金はもうけにはならないで出版繼續の費用となる。

▲奈良市東笹鉾町廿三の新藤正雄つくる。新藤地學文庫をこしらえて居るが夫れが發行所といふ事になる。送金は振替口座大阪第三四九一八番へ願ひ度い。

912
6